

小学校における「古典に親しむ」授業づくり

— 音声による言語活動を生かした授業の展開 —

永野 真¹

新学習指導要領では、「古典に親しむ」態度の育成において音読指導を重視している。本研究では、混合文シートの活用や教材文の分割などの工夫を取り入れ、「文語の語調・リズムに親しむ音読」を基盤とし、現代語訳を使って内容を読み取った上で「登場人物の心情や自分の考えを生かす音読」を行う授業づくりに取り組んだ。音声による言語活動を授業の展開に効果的に生かすことで、「古典に親しむ」態度が育成されることが確認できた。

はじめに

平成20年1月の中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」（以下「中教審答申」という。）には、「我が国や郷土の伝統や文化を受け止め、そのよさを継承・発展させるための教育を充実することが必要」であり、「古典の指導については（中略）生涯にわたって古典に親しむ態度を育成する指導を重視する。」と述べられている。

国際社会に生きる日本人として、自国の伝統や文化に誇りを持ち、他国の伝統・文化やそこに暮らす人々を理解、尊重する態度の育成が求められている。

小学校国語科においても、古典をはじめとする「伝統的な言語文化」に親しませる授業づくりが求められている。本研究では、音声による言語活動を学習のプロセスに効果的に生かすことで、「古典に親しむ」態度を育成する授業づくりに取り組んだ。

研究の内容

1 研究の背景

文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」（2004）には、「音読や暗唱を重視して、それにふさわしい文章を小学校段階から積極的に入れていく」べきであり、「古典については、日本語の美しい表現やリズムを身に付ける上でも音読や暗唱にふさわしいもの」とであると述べられている。

また、「中教審答申」には、「言語文化としての古典に親しむ態度を育成する指導については、易しい古文や漢詩・漢文について音読や暗唱を重視する。」と記述されている。

平成20年3月に新小学校学習指導要領が告示され、国語科に、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が設けられた。高学年の指導事項として「親しみ

1 横須賀市立池上小学校
研究分野（国語）

やすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読すること。」が挙げられている。

これらのことから、古典を学習する過程に音読活動を取り入れることが重視されていることが分かる。

また、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」は「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の各領域の指導を通して、指導するよう述べられている。

今回は、「読むこと」領域の小学校高学年に新設された指導事項である「自分の思いや考えが伝わるように音読や朗読をすること。」と関連付けた授業づくりに取り組んだ。

2 研究の仮説

以上に述べてきた研究の背景を踏まえ、本研究では「古典に親しむ」児童を育成するための仮説を次のように設定した。

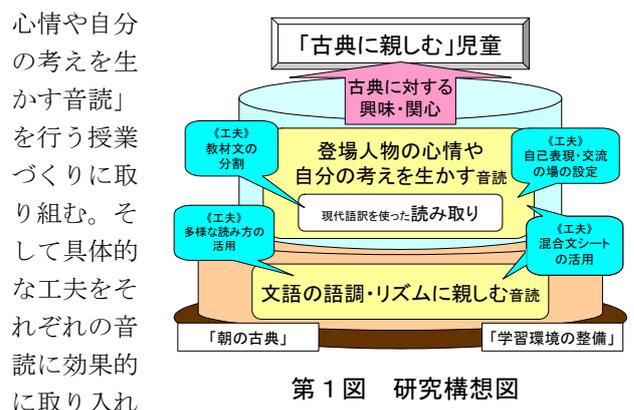
音声による言語活動を学習のプロセスに効果的に生かす授業を行うことにより、古典への興味・関心が高まり、「古典に親しむ」児童が育成されるであろう。

3 研究の構想

(1) 構想の概要

第1図は、研究の構想を図に表したものである。

「文語の語調・リズムに親しむ音読」を基盤とし、現代語訳を使って内容を読み取った上で「登場人物の



第1図 研究構想図

ることで、児童の古典に対する興味・関心を高め、「古典に親しむ」児童の育成を目指す。

なお、授業以外でも「古典に親しむ」授業づくりを補助する手立てとして、「朝の古典」「学習環境の整備」を行う。

(2) 二つの音声による言語活動の導入

ア 文語の語調・リズムに親しむ音読

音読活動の基盤として「文語の語調・リズムに親しむ音読」を毎時間繰り返し行う。

小学校学習指導要領解説国語編（2008）では、文語や文語調の文章には「独特のリズムや長い年月を経て培われてきた美しい語調」が備わっており、「音読することにより、その美しさや楽しさを感覚的に味わうことができる。」と述べられている。繰り返し音読し、文語の良さを味わったり、文語の文章に慣れ親しんだりすることは、古典に対する興味・関心を高めると考える。

イ 登場人物の心情や自分の考えを生かす音読

本研究では「読むこと」領域の指導を通して、古典の指導を行うこととした。「伝統的な言語文化に関する事項」の高学年の指導事項である「古典について解説した文章を読み、昔の人のものの見方や感じ方を知ること。」と「読むこと」領域の指導事項である「自分の思いや考えが伝わるように音読や朗読をすること。」を関連付け、「登場人物の心情や自分の考えを生かす音読」を行う。

小田（2008）は、前述したような古典を繰り返し音読し慣れ親しませる指導を「古典に親しむ態度育成の入り口」とした上で、「入り口からさらに作品世界に深く入り込んで、情景をまざまざと思い浮かべたり作中人物に同化したりして、古典の世界に遊ぶことで古典に親しむ境地が開けてくる。」と述べている。

内容理解を通して読み取った昔の人の心情を自分なりに表現したり、音読発表会でそれぞれの音読を発表し、感想を述べ合ったりすることは古典に対する興味・関心を高めると考える。

(3) 音読における具体的な工夫

ア 多様な読み方の活用

文語の音読における習熟の段階に応じて、多様な読み方で音読させ、音読そのものを楽しませる。

まだ文語に慣れていない段階では「追い読み」に取り組ませる。「追い読み」は、教師が一定の範囲を範読した後、児童が同じ部分を繰り返し読むという読み方である。少し慣れてきた段階では、主体的に音読させるために「たけのこ読み」などに取り組ませる。「たけのこ読み」は、指定した範囲の中から自分の読みたい箇所を2～3箇所決め、選んだ箇所が来たら立って読み、終わったら座るという読み方である。

イ 混合文シートの活用

音読では会話文は文語、地の文は口語の混合文シー

トを活用する。昔の人のものの見方や考え方を読み取らせるには、ある程度の長さのテキストが必要であると考える。しかし、児童の発達段階などを考慮すると、文語を長文でそのまま教材とすることは難しい。混合文にすることで、文語に対する抵抗感を軽減し、まとまりのあるテキストを教材として扱うことができると考える。

会話文のみ文語にしたのは、「登場人物の心情や自分の考えを生かす音読」の場面で、会話文の方が心情を込めて音読しやすいと考えたからである。

ウ 教材文の分割

教材を前半と後半に分けて指導を行う。児童の「早く結末が知りたい」という読み取りへの意欲を高めるとともに、後半の展開を予想することで前半の読みも深まり、音読表現もより豊かになると考える。

エ 自己表現・交流の場の設定

各グループが音読を発表し、その感想を述べ合う場面として音読発表会を設定する。音読活動の明確な到達点を意識させ、音読の意欲を高めることや、音読を発表し合うことでその差異に気付かせたり、児童に達成感を味わわせたりすることをねらいとする。

(4) 授業づくりを補助する手立て

「朝の古典」として、朝の会で古典の音読を行う。テキストは、文語の語調・リズムに親しむことを主眼において選定する。教師の範読後、児童に追い読み・一斉読みをさせる。また、古典の世界に少しでも多く触れさせるため、「朝の古典」の内容とリンクさせた「古典通信」を発行し、昔と今の価値観や生活様式の違いなどに気付かせる。

「学習環境の整備」として、現代語訳された「竹取物語」「宇治拾遺物語」「御伽草子」など古典に関連する書籍を教室に配架する。児童に親しみのある「かぐや姫」「こぶとりじいさん」「浦島太郎」などの昔話が収められており、手に取るきっかけを作りやすいと考える。さらに、教師がそれぞれの本の内容から「古典クイズ」を作り、教室に掲示する。また、百人一首を用意して自由に遊べるようにしておく。

4 検証授業

(1) 児童の実態

検証授業前7月に所属校6年2組（31名）に対し行ったアンケート（以下事前アンケート）によると、「竹取物語」の冒頭（教科書に掲載）などに対して、「意味が知りたい」と感じている児童が6割近くに上った。一方、音読活動に対して抵抗を感じている児童は半数近くいた。理由は「読むのが面倒くさい」「大きい声を出すのが苦手」などであった。

(2) 教材

教材選定に際しては、学習に意欲的に取り組ませるため、内容が分かりやすく読んで楽しいこと、中でも

登場人物が児童の年齢に近いことを考慮した。児童が作中人物に感情移入することで、心情の読み取りが深まり、より豊かな表現活動につながると考えた。

以上のことを踏まえて、教材には「児の飴食ひたること」を選定した。これは鎌倉時代成立の仏教説話集「沙石集」に収められている説話の一つである。ある山寺に住む児が、けちなお坊さんが隠れて食べている水飴を、知恵を働かせてお坊さんに怒られずにまんまと食べてしまうという話である。

なお、対象児童の実態に配慮して、片仮名書きを平仮名にするなど原文の表記を一部改めた。

(3) 授業の流れ

授業の流れは第2図の通りである。

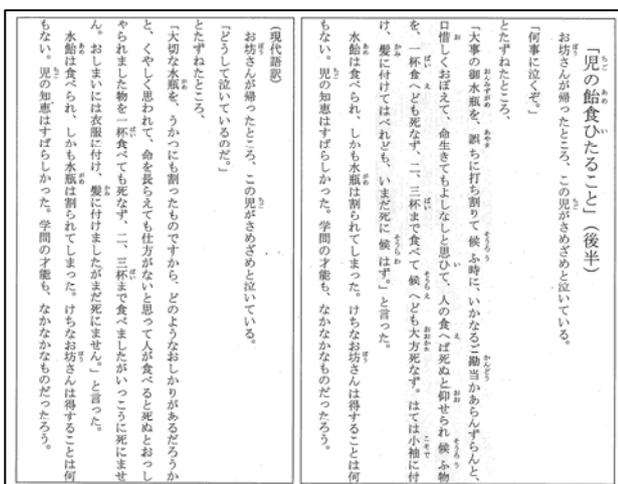
教材は、児が飴を食べ、お坊さんの水瓶を割るところまでを前半、お坊さんが寺に戻り、児が知恵を働かせてお坊さんに怒られず切り抜けるところまでを後半として指導した。

一次（1時）では、児童に教材理解の助けとなる画像などを提示した。

二次（2、3時）では教材プリント（第3図）を用いて学習させた。右半分の「混合文シート」で教材を音読させ、左半分の現代語訳を使って登場人物の心情や場面の様子を読み取らせた。教材には振り仮名を付け、歴史的仮名遣いについても簡略に説明した。



第2図 授業の流れ



第3図 教材プリント

三次（4、5時）では、文語と口語の混合文のシナリオ（第4図）を使用して、「登場人物の心情や自分の考えを生かす音読」を目指す活動を段階的に行った。

まず、教材の前半部分は指導者が、音読のルール（文

番号	内容
(9)	お坊さんが帰ったところ、この児がさめさめと泣いている。
(10)	「何事に泣くぞ。」
(11)	「とたずなせよ。」
(12)	「大事の御水瓶を、隠ちに打ち割って候ふ時に、」
(13)	「いかなる御言あらんやらん、口惜しくおぼせて、」
(14)	「命生きてもよしと思ひて、人の食へば死ぬと仰せられ候ふ物を、」
(15)	「一杯食へども死なす、」
(16)	「二、三杯まで食へ候へども大が死なす、」
(17)	「はては小指に付け、髪に付けてははれども、」
(18)	「いまだ死に候はず、」
(19)	と言つた。
(20)	水飴は食られ、しかも水瓶は割られてしまつた。けちなお坊さんは得ずることは何もない。
(21)	児の知恵すばらしかつた。学問の才能も、なかなかのものだつたらう。

第4図 混合文のシナリオ

語の部分を一一人一回は必ず読むこと、登場人物の気持ちなどはシナリオに書き込むことなど）や音読の工夫（強弱・間の取り方・人数を増やすなど）を確認した。

次に、登場人物の会話や場面の様子の中で特に重要だと思ふ箇所（ここぞポイント）を考えさせ、なぜその箇所が重要だと思つたのか、理由も併せて考えさせた。この活動により、児童は文章を読み込み、人物の心情や場面の様子についての理解が一層深まると考えた。

後半部分は実際に発表するグループ（4人程度）で音読の工夫を考えさせ、役割分担をさせた。練習していく中で気付いた点があれば、さらに工夫を加えたり、改善させたりした。

四次（6時）では音読発表会を行い、互いの発表が終わった後、感想を述べ合わせた。

5 検証授業の結果と考察

検証授業中の児童の様子や使用したプリントと、検証授業後10月に所属校6年2組（32名）に行ったアンケート（以下事後アンケート）及び振り返りカードなどを基に検証授業の結果を考察する。

(1) 授業づくりを補助する手立て

「朝の古典」については、多くの児童が「リズムが好き」「リズムが良くて面白かった」などという感想を述べていた。中には、テキストを暗唱できるようになった児童もいた。

「学習環境の整備」に関しては、「古典クイズ」などにより児童は進んで書籍を手取るようになった。また、用意した百人一首で、休み時間に遊んでいる姿が見受けられた。

(2) 二つの音声による言語活動

ア 文語の語調・リズムに親しむ音読

「多様な読み方の活用」「混合文シートの活用」の工夫について考察した上で、それらを生かした「文語の語調・リズムに親しむ音読」が児童の古典に対する興味・関心を高めたかどうか、検証する。

まず、「多様な読み方の活用」についてである。事後アンケートの「音読は楽しかったですか」という問いに対して、肯定的に回答した児童は88%であった。その理由を聞いたところ、8名の児童が「たけのこ読み」「川読み」など音読の形態を挙げており、そのうち6名が「たけのこ読みが楽しかった」と回答した。第5図はたけのこ読みの様子である。自分で読みたい箇所を決めたり、他の人の音読をよく聞いてタイミングを合わせたりといった、主体的な音読が可能なたけのこ読みが、児童の音読に対する意欲を高めたと考える。

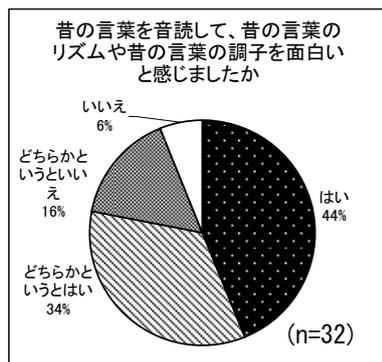


第5図 たけのこ読みの様子

よく聞いてタイミングを合わせたりといった、主体的な音読が可能なたけのこ読みが、児童の音読に対する意欲を高めたと考える。

次に、「混合文シートの活用」についてである。事後アンケートの「昔の言葉と今の言葉が混じっているプリントは、昔の言葉だけのプリントと比べて音読しやすいと思いますか」という問いに対して、肯定的に回答した児童は91%であった。混合文シートを活用したことで、児童の文語に対する抵抗感を軽減したと考える。しかし、主として文語の語調やリズムを味わうことをねらいとしたテキストの場合、一部口語にすることでその語調やリズムが損なわれ、ねらいが十分に達成できないことも考えられる。学習のねらいに即して、混合文シートを活用していくことが重要である。

これらの工夫を生かした「文語の語調・リズムに親しむ音読」を行った結果、事後アンケートの「昔の言葉を音読して、昔の言葉のリズムや昔の言葉の調子を面白いと感じましたか」という問いに対して、肯定的に回答した児童は78%であった(第6図)。毎時間繰り返し音読させたことで、文語の語調・リズムに親しみ、古典に対する興味・関心が高まったことが分かる。



第6図 事後アンケート

イ 登場人物の心情や自分の考えを生かす音読

「混合文シートの活用」「教材文の分割」「自己表現・交流の場の設定」の工夫について考察した上で、それらを生かした「登場人物の心情や自分の考えを生かす音読」が児童の古典に対する興味・関心を高めたかどうか、検証する。

まず、「混合文シートの活用」についてである。事後アンケートでは94%の児童が「児の飴食ひたること」の話の内容が面白かったと回答しており、その理由として「児の知恵・言い訳」の面白さを挙げた。「混合文シートの活用」により、比較的長い「児の飴食ひたること」全文を扱うことが可能になり、多くの児童が内容の面白さを感じることができたと考える。

次に、「教材文の分割」についてである。事後アンケートの「前半と後半に分けて学習しましたが、話の前半を読んだ後、話の続きを早く読んでみたいと思いませんか」という問いに対して、肯定的に回答した児童は84%であった。

振り返りカードによると、前半の読み取りの授業後は、「児がどんないいわけをしたのが気になる」など、この後の話の展開に興味・関心を持っている記述が見られた。後半の読み取りの授業後は、「どんないいわけをしたのが分かってよかった」「児はとてまあかしくかった。自分じゃあ絶対そんなことは思いつかないと思った」と児の知恵の素晴らしさに感心する記述が見られた。

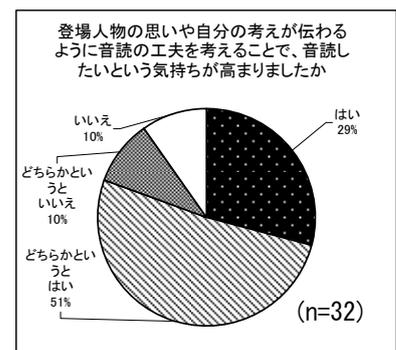
話の展開を予想させ、「もし自分だったら」と児の立場に立って考えさせることで、内容の読み取りに対する意欲を高めるとともに、より深く教材を読み取るきっかけになったのではないかと考える。

続いて、「自己表現・交流の場の設定」についてである。事後アンケートによると、音読発表会について「みんなの発表を聞いて、みんなの考え方が分かった」「うまくできるか不安だったけど、できたら達成感があつた」など、他との差異への気付きや達成感に関する記述が見られた。

また、互いの音読に対する感想を述べ合う際、よかったところやアドバイスを挙げさせるようにし、悪かったところを羅列しないよう注意したことで、互いを認め合う雰囲気づくりができたと考える。

これらの工夫を生かした「登場人物の心情や自分の考えを生かす音読」を行った結果、事後アンケートの「登場人物の思いや自分の考えが伝わるように音読の工夫をすることで、音読したいという気持ちが高まりましたか」という問いに対して、肯定的に回答した児童は80%であった(第7図)。

音読のどんなところが楽しかったかという質問に対して「お坊さんや児の気持ちを考えたところ」「強く読んだり、いろいろ工夫したりして読むところ」な



第7図 事後アンケート

ど、登場人物になりきったり、音読の工夫を考えたりする活動が楽しかったと回答した児童が多かった。

第8図は、A・B児が使用した混合文のシナリオから、児のセリフ「一杯食へども死なず」及びその音読の工夫の記述を抜粋したものである。



第8図 混合文のシナリオから抜粋

A児のグループでは、「死なず」とその直後

にある「大方死なず」は、児の「死にたかったけど死ねなかった」という心情が込められているから、強く読んだ方がよいということで、「死なず」という言葉をだんだん大きく、強く読もうと考えていた。

B児のグループでは、「食べても死ねなくて落ち込んだ」という心情が込められているのではないかと、としてその一行をだんだん小さく読もうと考えていた。

それぞれのグループが、読み取った登場人物の心情や場面の様子を生かして音読の工夫を考え、自分たちなりに表現しようとしていることが分かる。また発表会前にグループ間で互いの音読を聞き合いアドバース合う姿も見られ、自分たちの音読表現をさらに高めようという意欲が感じられた。

なお今回の学習では、本文の読み取りを基に音読の工夫を考えさせているが、大幅に逸脱した読み取りでなければ、その工夫を認めることにした。

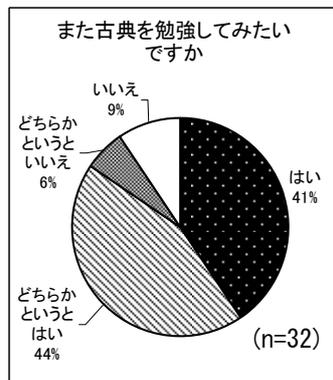
以上述べてきたように、「混合文シートの活用」「教材文の分割」「自己表現・交流の場の設定」の工夫を生かして「登場人物の心情や自分の考えを生かす音読」を展開した結果、児童の古典に対する興味・関心が高まったと考える。

(3)「古典に親しむ」児童の育成

事後アンケートの「また古典を勉強してみたいですか」という問いに対して、肯定的に回答した児童は85%であった(第9図)。

振り返りカードには「これからも自分で昔の言葉と今の言葉を比べていこうと思った」「他の古典を読んでみたくなった」といった記述が多く見られた。

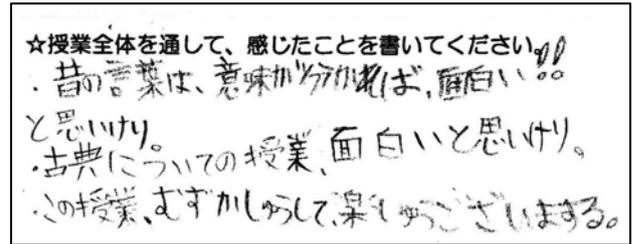
児童が、なぜこのように今後の古典学習や他の古典作品に



第9図 事後アンケート

対して興味・関心をもつようになったのかを考察する。

振り返りカードによると、C児は感想を「むずかしゅうして」「思いけり」などのように文語調で書いており(第10図)、古典に親しんだ様子が強く感じられた。



第10図 C児の感想(6時間目)

【振り返りカードより】

またC児の記述からは、古典の学習において「意味が分かる」ことが面白さにつながるということが読み取れる。さらにC児は難しさを感じながらも、その一方で古典の授業が楽しかったとしている。学習過程に乗り越えられる程度の難しさが存在したことが、古典に親しませることにつながったと考えられる。

第11図の複数の児童の記述からは、繰り返し音読活動を行うことで文語が読めるようになり、古典への興味・関心が高まっていることが分かる。

- いっぱい読むとだんだん簡単になってきて、一人で読めるようになった。
- だんだん読んでいくうちに慣れてきて、あっ！これ面白いなと思った。
- くり返し音読しているうちに文語がすらすら読めるようになって、楽しくなってきた。

(下線は筆者)

第11図 児童の感想(6時間目)

【振り返りカードより】

未知の言葉であった文語の文章がすらすら読めるようになったという満足感は、「古典に親しむ」授業づくりにおいて重要であると考えられる。

第12図のD児の振り返りカードの記述からは、学習

(1時間目)

- 音読発表会をやると聞いて、やる気が減った。

(2時間目)

- 気持ちを考えるのは好きだったので楽しかった。

(4時間目)

- 読み方を自分たちで考えて書くのが面白かった。けっこう強めて読むところがいっぱいあった。読むのが楽しみになった。

(6時間目)

- 昔のお話にとっても面白いお話があることを知った。昔の言葉のままだと意味が分からないけれど、昔の言葉を見て、どんなお話か想像するのも楽しかったかなと思いました。

(下線は筆者)

第12図 D児の感想【振り返りカードより】

を進めていくうちに、音読活動に対して意欲的になっていることがうかがえる。

1時間目の記述からは、D児が学習に対してあまり積極的ではなかったことが分かる。2時間目、4時間目の記述からは、登場人物の読み取った心情が伝わるような音読の工夫を考える活動が、D児の意欲を高めたことが分かる。6時間目の記述からは、D児が昔の話を「面白い」と感じており、今後の古典学習に対しても前向きな気持ちでいることが読み取れる。

ただ音読させるだけでなく、内容を理解した上で行う「登場人物の心情や自分の考えを生かす音読」を取り入れたことが、D児の古典・音読への関心・意欲を高めるのに効果的であったと考える。

また、第13図の複数の児童の記述からも、「古典に親しむ」児童を育成するためには、教材の内容を理解させることが重要であることが分かる。

・最後に読んでもらった昔の言葉では、意味が分かったので、聞いていても面白かった。
・最後の方はお坊さんや児の気持ちも分かってきたし、現代語を聞いてその後文語で聞くと、何を言っているのかも分かってきたのでよかったですと思う。
(下線は筆者)

第13図 児童の感想（6時間目）

【振り返りカードより】

内容を理解することで古典を楽しんでいると感じるということは、事前アンケートにおいて、文語の文章を聞いて「意味が知りたい」と感じた児童が多かったという実態とも合致する。

さらに、事後アンケートの「児や坊主になりきるのが楽しかった」「お坊さんや児の気持ちになって読めるとうれしい」といった記述からは、児童が内容理解の上で登場人物の心情を込めて（登場人物になりきって）音読することが楽しいと感じていることが分かる。これは、前述した小田の「作中人物に同化して古典の世界に遊ぶ」ことが古典に親しむ態度の育成につながるという論にも通じる。

以上の考察から、今回の授業づくりにより「古典に親しむ」児童が育成できたと考える。

6 研究のまとめ

(1) 研究の成果

本研究を通して、小学校の古典の授業づくりにおいて「文語の語調・リズムに親しむ音読」を基盤とし、「登場人物の心情や自分の考えを生かす音読」を行うことで、古典に対する興味・関心を高め、「古典に親しむ」態度を育成できることが確認できた。

また、音読や古典に対する抵抗感を軽減させたり、教材の内容に興味をもたせたりするためには、児童の

実態に応じて「混合文シートの活用」「教材文の分割」などの工夫を学習に取り入れることも有効であることが分かった。

(2) 今後の課題

今回は「読むこと」領域を通して古典の指導を行ったが、「話すこと・聞くこと」「書くこと」領域も含め、これらの領域を通じた指導方法についても、今後検討していかなければならない。

また、中学校の古典の指導事項・内容を把握し、小学校の「古典に親しむ」授業の成果が中学校の古典学習と有機的に結びつくよう、中学校との接続を配慮して授業づくりを行う必要がある。

おわりに

本研究では、新小学校学習指導要領で求められている「古典に親しむ」態度の育成に関して、一定の成果を得ることができた。限りある指導時数の中で「古典に親しむ」授業を行うには、児童の実態に即した指導の工夫が重要である。「また古典を学習してみたい」と思う児童、学習や生活の中で古典の世界を身近に感じ関わっていきける児童を育成する授業づくりを、今後も研究していきたい。

引用文献

- 中央教育審議会 2008 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」
文化審議会 2004 「これからの時代に求められる国語力について（答申）」
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/bunka/toushin/04020301/015.pdf (2009.5.12取得))
文部科学省 2008 『小学校学習指導要領解説国語編』東洋館出版 p.93
小田迪夫 2008 「『読み慣れ』を入り口に、表現創造を出口とする指導」（『教育科学/国語教育』8月号）明治図書 p.12

参考文献

- 高橋俊三 2008 『声を届ける 音読・朗読・群読の授業』明治図書
中山孝志 「たけのこ読み10のバリエーション」
(<http://www5f.biglobe.ne.jp/~takashi-nakayama/takenoko10.htm> (2009.6.2取得))
渡邊綱也校注 1966 『沙石集 日本古典文学大系85』岩波書店